

## ハガキによるあなたの「平和論」①

新潟県 樋口隆太郎

沖縄の戦場で死んだ人達の中には、私達の世代の人が多かった。ひめゆりの塔や健児の塔に参拝した時は、身内か兄弟の霊に祈りを捧げたように感じた。沖縄の空と海は、その時、まぶしいほど青かった。それは、今も自分の眼に焼きついている。

「平和」という意味は私にとって、決して言葉や文字の観念ではない。現実には、この摩文仁の丘で生命を断った人達と同じ世代だからである。だからこそ、強烈なものであった。

勤労働員で戦場には行かなかったが、爆弾の下をくぐり抜けて助かった私は、戦争というものが体内に深く刻み込まれた。8・15の時点でその体験は終わったが、その時17歳であった私は、それまで平和という言葉も体験もなかったのである。本当に平和という実感を持てるようになったのは、それから数年後ではなかったかと思う。

体験したことのない実感確かめながら身につけていっただけにそれは今ではもう誰からも突き崩されないだけのものになってしまった。戦争体験があればこそ平和体験も確たるものが身についたと考えるのが、私の「平和」体験の実証的な基礎である。

あれから30年、こつこつと積み重なってきた平和体験は、もう戦争体験よりも多くなった。それだけに自分では突き崩せない。生か死かといわれた時に、弱者の人間は必ず生を求めるだろう。平和とはそういう人間の本能が求めるものであり、他人の干渉は許されないものである。そこに立つ時それを原点とした平和と言うものを、これからも考えていくであろうと信じたい。